

ヨブと共に歩む (WALKING WITH JOB) ¹

レスリー・C. アレン (Leslie C. Allen)

川嶋 章弘 訳

ヨブ記は西洋文学の古典と見なされている。それは人間の苦しみに関する壮大な記録であり、また苦しみを理解し、そのような形でそれを克服しようとする英雄的試みの壮大な記録でもある。しかしヨブ記はしばしば綿密に研究されるよりはむしろ、あまりよく知られないままに称賛だけされている。同じことは、日本文学の傑作にも当てはまるのではないだろうか。ヨブ記は演劇仕立ての作品であるが、しかし人間が経験することを真実に反映したものである。ヨブ記の本質的な次元はその神学的視点であり、おそらく正典としてヨブ記を保持しているキリスト者あるいはユダヤ人だけが、この視点を十分な共感の深みまで理解することができる。

ヨブ記は文学的次元で変わった特徴を持っている。一方で、そこに登場する神は、明らかにヘブライ語でその名を「ヤハウエ」と言われたイスラエルの神である（しかし、この名は実際に発音される時は「主」と呼ばれた）。他方で、ヨブ記の地名が示すように、基本的な物語はエドムに由来する。エドムは知恵で有名な場所であり、エドムに関する何らかの物語が、イスラエル人の視点に基づいた神学的な議論のための場面設定として明らかに利用されている。

ヨブ記はプロットと登場人物を伴った物語であり、そのほとんどは長大な対話によって構成されている。物語の語り手が行っていることは、読み手が共有するようにと招かれ、また同意することを期待されている世界を構築することである。この書物においてその世界とは、無実なままに苦しむということが経験される世界である。ヨブは「無垢な正しい人で、神を恐れ、悪を避けて生きていた」²という冒頭の一文は、洗礼者ヨハネの両親であるザカリアとエリサベト（ルカ 1:6）についてのルカの序文の記述において、新約聖書の並行を持つ。彼らについては「神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった」と記されている。しかし、先程のヨブ記の記述の方が、ヨブ記全体の原則を定め、また読者にそれを自分のものとするよう要求しているという理由で重要である。読み手は、ヨブ記冒頭の記述をそれぞれの登場人物が語ることをすべてを判断するための基準として受け取らなければならない。これは、苦しむことになっているこの男（ヨブ）について知られるべき最も重要な事実であり、読み手はそれを踏まえて、ヨブ記が語り続けるほかのすべての発言を吟味しなくてはならない。ヨブの無実について語ることは、彼に罪がなかったこと

¹ 訳者注： 本稿は、2020年2月4日に、東京神学大学で行われたL.C.アレン教授（フラー神学大学、カリフォルニア）による講演原稿の全文を、訳者（横浜指路教会伝道師、川嶋章弘）が翻訳したものである。

² 聖書に言及される際は、New Revised Standard Versionの引用に基づく。

を意味しないが、しかしそれは、ヨブが耐え続けた深刻な苦しみについて、彼に倫理的な責任がないことを確証する。それは、ヨブの友人たちがそうしたように、被害者であるヨブを非難すれば説明できるとして切り抜けることができないことを意味する。「それは彼らの問題を解決するかもしれないが、ヨブあるいは私たちの問題を解決することはない。」³

もし私たちが無実の人の苦難についてのヨブ記の要素をその神学的次元に結びつけるならば、私たちはさらに、ヨブ記が二つのことについて語ろうとしていると言うことができるだろう。第一に、ヨブ記は、無実の人の苦難——自分自身に明らかな過ちがないにもかかわらずそこへと引き込まれうるという類のもの——というものが存在すると主張しようとしている。第二に、ヨブ記は、神の摂理の本質を、またそれゆえ神と無実の人の間の関係を、様々な仕方で考察しようとしている。

本シンポジウムでの私の講義においては、詩編において見いだされる苦難の説明に役立つ多様な解釈に注目したい。そこで見出される視点を確認することは有益であろう。第一に、〔詩編においては、〕神に直接的な責任のない苦難の中で、神に助けを求めることがある。第二に、神が苦難の原因として消極的に介入していたと認識した後に、必要な最初の一步として告白の祈りをささげることがある。第三に、不当な苦難に直面して無実を申し立てることがある。第四に、神が苦難を直接引き起こしていたり、あるいは期待される仕方で介入せずに苦難を引き延ばしているという理由で、神に訴えることがある。ヨブ記を複雑にしているのは、苦しむヨブの事例を提示する際に、ヨブ記がこれらすべての種類の説明や反応を含みながらも、その一方では何よりもまずヨブの無実という立場を保持している点である。ヨブ記は、一連の選択可能な解釈の可能性を示しながら一つの事例を提示することによって苦難の理解へと到達している知恵の書物なのである。

私たちは、ヨブ記が属している旧約聖書の知恵文学の神学的な観点が、創造主としての、つまり世界を創造し保持すること両方に対して責任のある神の働きにあることを知らなければならぬ。預言書と詩編は特に創造主としての神への言及を取り入れているにもかかわらず、旧約聖書の残りの部分のほとんどは、イスラエルと神の契約をその第一の神学的前提と見なしている。詩編からの別の有用な視点は、人間の人生は三つの時期へ分けられるというものである。すなわち、人生がほとんどの部分で順調に流れる「順境の時期」(season of orientation)、危機が私たちの人生を襲う「逆境の時期」(season of disorientation)、また、人生が再び安定したものへ回復する「方向転換の時期」(season of reorientation)である。⁴

³ Harold S. Kushner, *When Bad Things Happen to Good People* (Schoken Books, 1981), 40.

⁴ この洞察は Walter Brueggemann に負っている。Brueggemann はまず“Psalms and the Life of Faith: A Suggested Typology of Function” (*Journal for the Study of the Old Testament* 17 [1980], 3-32)においてこの理解を提示し、同じ内容が *The Psalms and the Life of Faith* [fortress, 1995, 3-32]で再録されている。その間、私の Fuller 神学大学の同僚である John Goldingay は、*JSOT* 20 (1981) 85-90 において、重要な論文 “The

旧約聖書においてヨブ記は、箴言、コヘレトの言葉と同じ知恵文学の範疇に含まれる。箴言は、伝統的な倫理が重んじられていた幸福な時代に整えられた規範的知恵を示す一つの例である。後の時代になって、ヨブ記とコヘレトの言葉の両方が、古い道德の目印がもはや認識されず、また神の導きの御手がもはや見られない全く混乱した世界にあって、知恵が何を意味するかを問おうとしている。コヘレトの言葉の場合は人間社会において、またヨブ記の場合は個人の苦難においてその問いに取り組んでいる。かつて旧約学の教授で、また Fuller 神学大学の学長でもあった David Allan Hubbard はこう書いている。「箴言はあたかも『ここに人生のための諸規則がある。試してごらん、上手くいくから』と言っているようである。それに対してヨブ記とコヘレトの言葉は『私たちは実際に試してみたけれども、上手くはいかなかった』と言っている」⁵と。ヨブの友人たちは箴言の古い世界にしがみついている。そこでは道德的であれば成功が報酬として与えられるが、不道德であれば失敗が報酬となると理解されていた。その一方でヨブは、そうした考えは、彼自身の置かれた状況とは関わりがないと抗議する。ヨブ記は、ヨブが「神を畏れ、悪を避けて生きていた」という冒頭の描写から、その考えを貫いている。物語の語り手は、この評価を 1:8, 2:3 において神に確証させている。「無実の人の苦難」という主題は、否定できない一つの正当な神学的カテゴリーとして、堅固に主張されているのである。

ヨブ記のプロローグは天上の場面を含んでいる。そこにおいては一人の神の使いが紹介され、固有の名前によってではなく、その働きによってヘブライ語で「サタン」と呼ばれている。これは「告発者」を意味する。ここで「サタン」は、神に仕える働きにおいて、地上での神の僕たちの間に偽善がないかどうかを調べる神の使いである。彼は、神の祝福を勝ち取る魂胆のためにだけ善良であろうとするような人物の候補としてヨブがふさわしいと考えた。ヨブは、どのようにしてサタンの「候補」から逃れられるかという精神的な駆け引きの渦中にある。サタンというこのキャラクターは、様々な名前を持つ神の敵である墮天使についてのユダヤ教的理解の発展の歴史において、先駆的存在である。この発展の歴史は新約聖書のサタンの概念に影響を与えている。これらの天上の場面において重要な点は次のことである。すなわち、神がヨブの苦しみに対して直接的な責任を負っておらず、むしろヨブの善良さ（神はヨブのこの点について既に個人的に確証している）を一時的に試すためにそうした苦しみが起こることを許容しているということである。それゆえこれらの場面はまた、ヨブの善良さが本物であって、偽善的でないことを示している。

ヨブの喪失は一つずつ列挙されている。すなわち彼は、農場の家畜と運搬用の家畜、そしてそれぞれの世話をする人々といった彼の生計の手段を失い、さらには息子と娘を失う。ここにおいては、自然災害と人間によってもたらされた災いの圧倒的な力が混じり合っている

Dynamic Cycle of Prayer and Praise in the Psalms”を寄稿している。この論文は、上で述べた三つの時期が循環あるいは「らせん」の形で現れ、より高められた形で「順境の時期」へと回帰していくと主張している。

⁵ D. A. Hubbard, “The Wisdom Movement and Israel’s Covenant Faith,” *Tyndale Bulletin* 17 (1966): 3-33 (p. 3).

る。それらが起こった直後のヨブの反応はどうであったであろうか。彼はその喪失を受け入れ、またそれらに神学的な意味を与えることさえしている。すなわち「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」(1:21)と。ひどい病に屈した後に、彼は2:10でもほぼ同じことを言っている。すなわち「わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいまだこうではないか」と。この段階ではヨブは一つの単純な答えを持っている。すなわち、神が祝福であれ苦しみであれどちらを届けることを選ぶとしても、すべてのことは全体に渡る神の摂理の観点から説明されえるのである。ヨブは、自分の以前の祝福においてだけでなく、彼の現在の喪失においても、神に直接的な責任があると見なす。物語が展開される中で、彼が固執するこの前提は、私たちがこれから見出す通り、ただちにヨブにとって問題を引き起こすことになる。

ヨブが直ちに悲劇へ続いていく茫然自失の衝撃を経験していた時、彼の三人の友人はやって来て、親しみやすい仕方でもヨブと共に無言で座り、できるだけのことをした。3章においてヨブは、ようやく彼の不幸に対する応答を言語化することができる。彼は、自分は決して生まれるべきではなかったと望みつつ、苦悩に満ちた嘆きの独白を行っているが、その苦しみは非常に耐えがたいものがある。彼は被造物でありながら、神が創造されたこの世界から身を引くことを望む。この願いは、自分の生まれた日を消し去って欲しいという形で神に伝えられる。繰り返される「何故？」という彼の問いは、彼が自分の現在の生活を前向きな仕方では決して捉えられないことを表しているのである。

友人たちとヨブとの間の三巡する議論の最初は4-14章において見いだされる。友人たちのそれぞれが発言し、そしてヨブが返答する。4-5章において、明らかにヨブの否定的態度に危うさを感じたエリファズは、彼を説得しようと試みる。エリファズは、ヨブの敬意に満ちた神への畏れと彼の行いの完全さを認めた上で(4:6)、そうした事柄を、いずれ自分は苦難を克服するのだという励ましの根拠として理解するようにと説く。彼は、「死にゆく者は悪人である」という無垢な幻想の権威を主張する。この発言は、一方で、ヨブは死ぬことを望むべきではないということを示しながら、他方で、ヨブの子どもたちの死の理由をほのめかしている。ヨブは神に助けを求めべきであるし、神はきっと助けてくださる。神は、その摂理においてヨブに教訓を示そうとしているのであって、これを潜り抜けた後は、彼が以前に享受していたよりもいっそう祝福された人生にまで彼を至らせるのである。これに対して、6-7章でヨブはエリファズに返答している。すなわち「確かに神は私の苦難の背後にいて違いないが、しかし私は何故この苦しみがここまで極端なのかが理解できない。死ぬことが苦しみからの解放に思える。私は、神が私を苦しめるのをやめるように、またとにかく私を放っておくようにと願う。私はもう耐えられない。」祈りの中で神の方を向きながら、彼は7:7-21でそのように言っている。8章においてビルダドは、神について無礼な仕方でも語るヨブに驚いて次のように答えている。「確かに、ヨブの子どもたちは、自分たちの罪の故に死んだのかもしれない」と。さらに「あなたに関して言えば、もしあなたが無実ならば、神はあなたのために正常な状態に戻し、すべては再び良くなるだろう。心配することはない」

と言う。ヨブはその応答に満足せず、9-10章において次のように述べている。「私は、あなたが神の側に立って語っていることに気がついている。誰もがそうするしかない、そうではないか？ 神がとても強いので、誰も敢えて神に抵抗しようとはしない。だから、私の訴えを受けとめてくれる中立的な調停者がどこにもいない。しかし神が私を苦しめているのは間違っている。」ヨブは、9:25-10:22で再び祈りの中で神に語りかける。「神よ、あなたは、あなたが私に負わせておられる苦しみ私に値しないことを知っておられます。——これは、あなたがこれまでいつも私に配慮してくださったのとあまりにも違うではありませんか。」11章で、ツォファルの順番が巡ってくる。彼はこう考える。神を批判するとは、ヨブは何たることをしているのかと。ツォファルにとってそれは神への冒瀆であり、またヨブの罪深さの証拠であると思われた。さらに彼はこう考える。私たちは、私たちがそれを理解できない時でも、神が私たちの人生に引き起こしたことを受け入れるべきであると。ヨブは自分が罪を犯したことを悔い改める必要があり、そうしてこそ彼は先へ進むことができるのである。12-14章で、ヨブは議論の一巡目を終える。彼は12:1-13:19で友人たちに返答している。ヨブは彼らに、あなたたちは完全に間違っていると述べる。神は全能であり、しばしば破壊的にその摂理を用いられる——「私たちの世界の混沌とした状態を見れば、神がこの世界をどのような状況に陥らせているかが分かるだろう。」13:20-14:22で、ヨブは再び神の方を向く。「神よ、どうか私の言い分を公平に聞いてください。そして教えてください。あなたが何のために私を罰しているのかを。もしあなたがすぐにこの問題を解決してくださらないのであれば、私はきっと死に、手遅れになるでしょう。——死んでしまえばすべて終わりなのです。」

議論の一巡目における共通の前提は神の摂理である。世界で起こるすべてのことは、神の直接の意志の結果である。友人たちにとって、それは道徳的摂理 (moral providence) である。ヨブは神の摂理が存在するという友人たちの考えには同意するが、しかし彼自身の経験に照らして、そして神の摂理が気まぐれで、しかもそれが人々の道徳的に行いに左右されないものとして存在している (本来道徳的に行いが考慮されるべきなのに) という世界の状況に照らして、自らの考えを論じている。

15-21章における議論の二巡目はよりとげとげしくなっている。15章でエリファズは、ヨブの話は異端的であり、罪深さの確かな証拠であるとヨブに言う。16-17章でヨブは、友人たちがこれといった理由もなく彼に敵対している点で、神と同じくらい悪いと訴えている。神は苦難によってヨブを散々に攻撃した。ヨブは、神に反対して彼の味方となってくれるほかの誰かが天上にいることを望んでいる。18章で、ビルダドは悪しき者の運命についてヨブに警告する——もしヨブが引き続きこうした調子で話し続けるのであれば、彼はまさにそこへと向かうのである。19章で、ヨブは友人たちに黙るように言う——ヨブは、これといった理由もなく神が彼をひどく苦しめていることを知っている。ヨブは、たとえ自分の死後であっても、自分に対する非難を取り去る誰かが天上にいることを確信していると言う。真実は勝つだろう。ヨブは「贖う方」を探している。困難に陥った家族の一員を助け

に来るレビ記 25 章の人物と同じように、ヨブは自分の状況において、自分を守ってくれる天使のような存在を探しているのである——この存在は、告発するサタンに対立する存在と言えるだろう。⁶ヨブはここで、自分と神との間の「仲裁者」(umpire)あるいは調停者(arbitrator)について語っている 9:33 と同じような観点から、あるいはまた彼が「天の証人」に言及した 16:19 と同じような観点から、真実について証言してくれる人について語っている。20 章でツオフアルは、「ヨブ、その物言いは甚だしくひどい」と言っている。21 章でヨブは返答する。「いや、むしろ甚だしくひどいのは、神の道徳的摂理というあなたの前提である。それは私が知っている世界においてうまくいかない。」

22-27 章における三巡目の議論は不完全で、おそらく元来のテキストが保存されてはいないし、また所々理解するのが難しく、それゆえ現在置かれているこれらのテキストの位置が元来のものかどうか疑わしい。ここでは理解がより平易な部分を考察することにしよう。22 章でエリファズは、ヨブが今現在経験している苦しみの理由は、ヨブがあらゆる罪を犯したからに違いないと主張している。従ってヨブの唯一の望みは、悔い改めることである。ヨブは 23-24 章でこれに返答している。ヨブは、神と出会い、見たままの自分の状況を神に伝えることを望んでいる。ヨブは神が彼の味方になってくれると確信しているのである。しかし「私は神とどのように関わったら良いのか分からない」と彼は言っている。さらには、「いや、よく考えてみると、神に会うことは少しも役に立たない。神はすでに私に対立する立場を示したのだから」とも言う。24 章においてヨブは、なぜ神が悪しき者の悪を罰せず放っておくのか、またなぜ神はその悪の被害者を助けられないのかを疑問に思っている。「町では、死にゆく人々が呻き 刺し貫かれた人々があえいでいるが 神はその惨状に心を留めてくださらない」(12 節)。厳密に道徳的摂理の立場に立つ友人たちの考え方では、事柄をうまく説明できないのである。

これらの議論すべてを振り返ってみると、ヨブと友人たちは決して互いに同意できなかったことが分かる。彼らはそれぞれ異なった前提から語っていた。私たち読み手は、ヨブの前提は本質的に正しいことを知っている。彼が悲惨な喪失と苦難を耐えることになったとき、それは確かに無実の人の苦難の実例である。しかしヨブの友人たちは、語り手と神が自分たちをどう評価しているかに気づかずに、「いや、それは真実ではない」と、最終的にヨブに答えた。〔道徳的摂理の見地からすれば、〕ヨブがひどく苦しんでいるという事実は、ヨブが悪人として歩まざるを得ないことを意味していた。前進する唯一の方法は、ヨブが罪を認め、再び神との正しい関係に入り、祝福された生活をこれまでのように享受し続けることである。しかし、ヨブがそうすることを拒んでいるということがまさに、ヨブの罪を裏付けているのである。私たち読み手は、〔ヨブ記の意図に沿って、〕ヨブの友人たちの誤りを裁くよう求められている。彼らは、誤った診断をして薬を処方する医者のようにヨブの状況を誤解していた。実際ヨブは 13:4 で「あなたたちは皆、役に立たない医者

⁶ Norman C. Habel, *The Book of Job*, Old Testament Library (Westminster, 1985), 304-8.

だ」と言っていた。ヨブ記冒頭の天上の物語はヨブの苦難の直接的な責任が神にあるとは描いていなかった。しかしこれに対してヨブの友人たちは、人生においては神の道徳的摂理が非常に顕著に働いているという強い認識から論じている。そして彼らは、ヨブの悲惨な症状とそれがもたらす状況をヨブが否定していることが、ヨブの罪深さを証ししているとしか理解していない。

これについてヨブ自身の考えはどうだろうか？ 彼は苦しみで引き裂かれている。彼もまた〔友人たちと同じように〕神の摂理については確信しており、それゆえ彼は 1:21 において敬虔に「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」と言うことができた。しかし物語全体を通してヨブは、自分がこうした極度の苦しみを受けるに値すると認めることができない。ヨブが 13:26 で皮肉っぽく示唆しているように、神が十代の頃の何らかの過ちのことでヨブを罰している、というのでない限りは、それは認められないのである。

私たちはヨブの状況についての友人たちの理解をここで見直す必要がある。実は彼らは、自分たち自身が歩んでいる「順境の時期」の文脈から語っている。〔因果応報的な仕方、〕苦しみにはそれにふさわしい理由があると説明するやり方は、「順境の時期」の見方から見れば適切な解決策である。この見方は、善い人間は成功し悪い人間は苦しむという、論理的で望ましい前提を覆すことはない。そうした説明はより以前の時代の考えに基づいている箴言においては支持されていたが、ヨブ記はその説明に当てはまらない苦しみがあることを主張するために記されている。

物語が進んでいくにつれて、ヨブと彼の友人たちは、彼らが苦しみの解釈について部分的に同意していながらも、しかし同時に深刻な意見の相違が存在するという板挟みを解決することができなくなっていった。彼らは互いに考えが異なっていて、神の摂理については同意するが、摂理が道徳的な基準に基づいて存在していることについては異議を唱える。それぞれの側が頑として譲らず、互いに自身の前提に従って論じている。この議論に未来はない。ヨブは、神が自分を不公正に罰し続けていたと嘆き訴えた。それは、そうした見方だけが彼に残された唯一の論理的な説明だったからである。すなわち彼の考えでは、神の摂理は確かに働いているが、しかし適切な道徳的な原因はまったく存在しないのである。したがってヨブはどうかして解決策が与えられるよう望んでいる。それはヨブに苦しみを与えた神の介入〔の理由〕をうまく説明してくれるような解決策であり、しかもヨブと友人たち両方が同意できるようなものでなければならない。今までのところ、私たちはヨブ記を読む中で、詩編において提示されている苦難への四つの反応の内の三つを検討してきた。つまり、ヨブの友人たちがヨブにそうするようにと求めた罪の告白、ヨブによって表明された不満、そしてその不満に伴っていた自分は無実であるという主張である。私たちは、もしヨブが神と会うことを許されるとすれば、一体神はヨブに対してどのような判断を下し、まだどのような説明をされるのだろうかと思ひ巡らす。ここからヨブ記は新しい方向に向かって進みだしている〔ので、一体どうなるのかを見てみよう〕。

しかしながら、私たちはまず 28 章を検討しなければならない。この箇所にはふさわしい名前は付けられていないし、またここで話されている内容は、これまでのいかなる話し手によるものでもない。それは幕間としての役割を果たしているように思える。それはあたかも、演劇の途中で幕が下り、脚本家が舞台の正面に出てきて、観客に向かってこれまでの一連の議論からどんな結論が引き出されうるかを説明しているかのようである。この章はもっぱら知恵に関する内容である。12 節において「では知恵はどこに見いだされるのか」と言われ、また 20 節で再び「では、知恵はどこから来るのか」と言われるように、鍵となる問いかけがなされている。もし私たちがこうした視点からこれまでの議論を入念に調べていたとすれば、知恵に関係する主題が絶えず登場していたことに気がついていたことだろう。ヨブと友人たちは両方とも、絶えず自分たちの知恵の正しさ主張し、相手の知恵を否定していた。「知恵」という言葉はヘブライ語において用途の広い言葉である。舟を漕ぐことや土地を耕すこと、といったあらゆる技術的スキルが知恵という言葉には含まれていた。1-11 節においては、人間が得意な知恵の一種として、貴重な金属や石のための採掘の技術について語られている。しかし 12 節以降は、心と精神に関する知恵が主題である。人間はそういったことについての知恵を欠いているという主張がなされている。世界を創造し保持しそれゆえその秘密を理解している神のみが、そうしたことについて知っているのである。実際、ヨブと友人たちはこの点について落第点を取るに違いない。しかしそれにもかかわらず、ヨブはある意味で正しかった。彼は「神を畏れ、悪を避けて生きていた」と、序文において言われていた。それはヨブ記全体の前提であるだけでなく、無実の人の苦難のあらゆる実例において当てはまるメッセージを含むことになる。序文におけるヨブの称賛は 28 章の終わりで取り上げられている。「主を畏れ敬うこと、それが知恵 悪を遠ざけること、それが分別。」ヨブはこの観点において正しかったし、仮に私たちが彼と同じ立場になることがあるとすれば、私たちがヨブのように振舞うべきである。これまでの議論から、私たちがヨブのように苦しむ際に知恵に限りなく近づくために必要なことは、神に対する従順な信仰を保つことであり、そうした態度は倫理的に望ましい人生を保証する。確かに、ヨブは神に対して言葉にした不満において間違った方向に進んだが、しかしそうした不満は信仰の内側から出たものであり、外側から出ているものではない。今述べたことは、知恵に関するほんの僅かな内容に過ぎないし、知恵に関する非常に基本的な事柄である。しかしそれはまた、私たちがこれまでの議論から得ることのできたすべてでもある。いずれにせよ私たちは、もし神がヨブに会ってくださるといふならば、神がこれから語られることを聞き、そして神だけが持つ知恵の啓示においてこれから加えて示されることを聞くことを、心待ちにするのである。

ヨブは 29-31 章で締めくくりの独白を行っている。それは、神が直接的に自分と関わってくださることを意図しての究極的な挑戦である。29 章において、彼は物憂げに過去を振り返る。神の祝福の下で生き、貧しい人を保護し悪しき者に抵抗しているとして人々から名誉と尊敬を享受していた頃の、言わば「順境の時期」(season of orientation) を振り返

っているのである。30章においてヨブは、神が与える苦しみにによって恥と軽蔑だけを経験するような社会からの拒絶に直面し、自分の現在の状況が「逆境」(disorientation)へと転落してしまっていることを嘆き悲しんでいる。ヨブは神に直接話し始め次のように言う。「あなたは冷酷になり 御手の力をもってわたしに怒りを表される」(30:21)と。31章で彼は自分の無実を主張し、不道德な行為と言われる様々な罪を自分は犯したことがないという一連の誓いを立てている。もし自分が誤っていた場合、そうした誓いは神からの致命的な応報を招くので、ヨブは〔そうした誓いを立てることで〕自分の人生を危険に晒していることを認識しているが、彼はそれでも自分の認識が正しいと確信している。ヨブはここで23章において自分が無実について語っていたことを繰り返しているが、23章で彼はそのことを「神に会いたい」という願いと結びつけて語っていた。ヨブはこの31章に至って再び、神のみ前で自分の言い分を述べるという願いを表明しているのである。23章において彼は、そんなことが果たしてできるかという恐れを感じていたが、しかし今や彼は新たな自信に満たされているのである。

31:35における「全能者よ、答えてください」というヨブの訴えと挑戦に応じて、神はヨブに確かに語りかけてくださる。神は「嵐の中から」現れる。創造の神として「風の翼に乗って」(詩104:3)地上へとやって来られたのである。時折旧約聖書の中で見られるように、神はご自分を目に見える形で現わされる〔=「顕現」theophany〕ことがある。この神の顕現は、モーセやイザヤ、そしてエゼキエルへの神の顕現と同じように、神がもたらす重要なメッセージと結びついている〔語りの〕類型である。ヨブ記38-39章と40-41章における神の二つの演説は、ヨブへの反撃である。それらは、自らの苦難についてのヨブの前提に対して、そして暗にヨブの友人たちの前提に対して、強力に異議を申し立てている。

神がここでヨブに語りかけるやり方は、精神医学の療法士や牧会カウンセラーが時折クライアントを励ます際に用いられるプロセスの一例と見なすことができる。それは「再一枠づけ」(リフレーミング [reframing] = 理解のための枠組みが新たにされること)と呼ばれる。この呼び名は、プリンストン神学校のパストラルカウンセリングの教授であったDonald Capps⁷が、神の語りを表現するために用いたものである。「再一枠づけ」とは、今まで試した解決策に問題が生じてうまくいかなかった際に、有益な理解へと道を開く全く別の言葉によって悪い状況を理解することである。「再一枠づけ」はヨブ記において重要な役割を担っており、災いに襲われた後の状態に適用可能な新しい理解を生み出している。ヨブと友人たち両方の解決策は、実際問題があった。友人たちの解決策はヨブ記全体の前提に反するものであった。その一方でヨブの解決策は論理的にはヨブ記の前提と一致

⁷ Donald E. Capps, *Reframing: A New Method of Pastoral Care*, Minneapolis: Fortress, 1990, 147-68. CappsはHabel, *The Book of Job*の解釈に従っているが、その解釈が適切であると私には思えない。Cappsは、「再一枠づけ」という概念を、Paul Watzlawick, John H. Weakland, and Richard Fisch, *Change: Principles of Problem Formation and Problem Resolution* (Norton: 1974), 92-109. によって提示された研究に負っている。

していたものの、しかし明らかに神の性質について重すぎる代償を支払ったのである。ここにおいては別の解決策が必要である。それは、新たな視点から再出発するような解決策、根本的な問題を理解するための「再一枠付け」のようなものでなければならない。ここで私は概ね Terence Fretheim の解釈⁸に従い、またそれを展開させ、「再一枠づけ」の観点から理解してみようと思う。

神による最初の演説と、第二の演説の冒頭と中盤に見られる挑戦的な質問は、厳しく、また攻撃的である。それはまさに、そうした厳しい問いかけによってヨブの頑固な考えを粉砕し、彼が新しいアプローチを受け入れられるようにする必要があったためである。William Brown が言っているように、それらは「愛に根ざした叱責」⁹である。そして神は、次第に第三の説明（演説）に近づいていく。私たちは、神の話が人間の営みに焦点を当てていないことに驚かされる。それは、最初の演説が 38:26 において「誰もいない大地…そこには人が住んでいなかった」と語っていることから分かる。神は次のように主張している。すなわち、人間の問題に注目することは、この場合、視野を限定し過ぎて役に立たないと。創造主であり世界全体の保持者としての神の働きに基づいた、より広い視野が必要なのである。Fretheim が述べているように¹⁰、創造はヨブ記における対話の語りの多くの中で背景に退いていた主題であったが、しかし今や創造の主題は前面に出てきている。どのような世界を神は創造したのかという問いは、ヨブの状況を明らかにする根本的な問いである。それは神の「計画」(plan)、あるいは「世界の創られた目的」(design) についての問いである（これらの言葉を、NRSV は 38:2 において「助言」counsel と不十分に訳し、他方で NIV は「私の計画」my plans と訳している）。¹¹

そこで神は 38:4-38 において、生き物以外の被造物の創造の不思議について語っている。私たち読み手は、こうした内容が一体人間の苦難についてどんなことを明らかにしてくれるのかと困惑する。しかし実は、神の最初の演説は、一見すると人生が満足できる仕方で着実に流れている「順境の時期」(season of orientation) の視点のようである。それは、賛美と共に創造を祝う詩編の歌に、とりわけ 104 編によく似ている。例えばヨブ記 38:6-11 においては、まるで詩編 104:6-9 のように、海はその限界を知っているし、神の支配の下に固く留まっている。ここにはいかなる津波も無いのである！こうした神の最初の演説の提示においては、創造における道徳的な目的の余地さえ見いだされる。38:12-13 においては、曙の光が「大地の縁をつかんで 神に逆らう者どもを地上から払い落とす」ためにやって来ると言われている。言い換えれば、闇に紛れてこっそり行っている人間の悪

⁸ Terence E. Fretheim, *God and the World: A Relational Theology of Creation* (Abingdon, 2005), 199-247. 彼が主張する被造物の自由ということについては、R. N. Whybray, "Wisdom, Suffering and the Freedom of God," in *In JSOTSup 300* (Sheffield Academic Press, 1999), 231-45. をも参照せよ。

⁹ William P. Brown, *Character in Crisis: A Fresh Approach to the Wisdom Literature of the Old Testament* (Eerdmans, 1996), 90.

¹⁰ *God and the World*, 227-31.

¹¹ 訳者注：新共同訳は「神の経綸」。

を曙の光が閃光の如く暴き出し、それゆえ白日の下に晒されるのである。これは「順境の時期」のあるべき姿である。

38:38の後、神の最初の演説の第二の主要部分において、すなわち39節から38章の残りの部分、そして39章全体に至るまで、神は動物と鳥といった「生き物」に属する被造物を称賛することへと主題を変化させる。ここでは再び、その語られていることの多くは詩編104編の内容と響き合っているように思えるが、しかし14-15節においては人間に関する言及が欠けている。ここで言われていることの多くは正常で当然の事柄に思える。被造物はそれぞれ自分の生きる小さな世界で独立して生活し、またそれぞれ別個に世界に対して貢献しており、その様な仕方では創造の原理が示されている。ここにおいては神の世界の「順境の時期」の視座に当てはまる多くのことが言われており、それらは私たちの讚美を呼び起こすのである。

しかしこの最初の演説の第二の部分は同時に、「順境」の世界にうまく当てはまらない調和を欠いた旋律を奏でることになる。そこには、読むことで心をかき乱される二重の枠がある。獅子の獲物についての言及がこの部分において最も重要な位置づけを与えられていて、それはヨブ記38:39で始まり、41節における鳥（からす）の獲物についての記述へと続く。その一方でこの〔神の第一の演説の第二〕部分は、39:26-30のほかの二種類の猛禽類への言及で締めくくられている。猛禽類は詩編104編において現れないし、またそれらは創造主として神を賛美する教会の讚美歌においても現れない。しかし実際には、

（若）獅子の獲物についての記述は確かに詩編104:21に現れる。しかし私たちはここで、獅子の咆哮があたかも祈りであるかのように記されている魅力的な理解に気を逸らされてしまい、その存在を見落としがちである。私たちは——そして恐らくこの詩編を書いた詩人自身も——その獅子の祈りが「私たちに日々の生き物を与えてください（Give us this day our daily creature）。もしそれが人間であれば特別なごちそうです」といった内容だったかもしれないことをきちんと認識できていない。この演説の第二の部分において、〔この部分を囲い込む〕始まりの二つの例えと締めくくりの二つの例えは、心をかき乱す響きを生み出すよう意図されているように思える。神が創造した生き物たちが住むそれぞれの〔小さな〕世界は、食物連鎖の頂点に君臨するほかの被造物によってその境界が脅かされることになるかもしれない。もちろん、〔すべての動物の上に立つ〕その役割は、創世記9:3によればただ人間だけに割り当てられているものであるが（「動いている命あるものは、すべてあなたたちの食糧とするがよい」）。

神の第一の演説のこの部分においては、ほかにも心をかき乱されるような要素がある。「順境の時期」の観点から被造世界を理解することに含まれることとして、私たちは創世記1:26における神の約束を考えるかもしれない。すなわち「海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう」という人間に対する約束である。人間とほかの生き物の世界の間はこのような関係は否定されるべきではないが、それはあるところまでは真実であると言えるものである。そして〔既に述べた〕「人生の時期」の観点から私た

ちは、[こうした人間と生き物の関係が] 順境の時期に属していると言えるかもしれない。しかし、ヨブ記 39 章では、人間の支配に関するこの原理についての例外がある。私たちは 5-8 節で野生のろばについて、そして 9-12 節で野牛についての記述を読むが、これらの動物は人間の統治の枠を超えて、その支配に制約されていない。私たちはまた、19-25 節における軍馬について神が熱心に描写していることに心をかき乱される。軍馬は、少なくとも戦争の被害者の視点から言えば、「逆境の時期」に属している。

こうした主題は、40:7 で始まり 41 章の終わりへと至る神の第二の演説において、より恐ろしく展開されていく。ここでは怪物が神の創造の見事な見本として描かれており、まず 40:15-24 のベヘモット、次に 41 章のレビヤタンが登場する。レビヤタンは詩編 104:26 においては、飼いならされた害のない生き物であるのに！ 本物の動物（恐らくはカバとクロコダイル）を象徴するこれらの生き物は、41:22[41:25]における「おののき」という言葉によって、怪物の異常な力を表す言葉によって描写されている。怪物たちは、恐ろしいほどに人間の手に余る存在であり、私たちはこれらの動物の力が恐るべきものであると思うはずである。これらの状況において、人間はもはや創世記 1:26 に記されたような、動物たちを従わせるような支配する力を持っていないのである。

これらの神の演説は皮肉で満ちている。それは、ヨブの混乱した観点の外から彼を揺さぶる意図を持っている。ヨブは次のことを学ばねばならない。すなわち、神が人類にある程度の自由を与えたのとまったく同じように、被造物に属するほかの動物たちもまた、それらが自分たちの営みを行う中で、ほかの生き物の領域を侵す同じ力を持っているのである¹²。これが神が創られた世界のありのままの姿である。神が創られた被造物は、道徳的な制限の枠内で生きるようプログラムされたロボットではない。私たちが生きている世界には、リスクがあらかじめ織り込まれている。40:11-14 において、神ははっきりと次のように言う。すなわち、一人の人間に過ぎないヨブは、人間の持つ愚かさの問題に対処することはできず、従って暗に意図されることとして、彼はそうしてもたらされた結果に苦しまねばならない。これら全ての観点から考えると、1:13-19 におけるヨブの喪失は異なった意味を持つことになる。誰かによって突然襲われることや、雷や暴風によって破壊的な損害を被ることは、神の創られた世界で起こりうる事柄なのである。ヨブは今、自分自身が持っている理解のための枠組みを「再一枠づけ」(reframe) するようにと神から言われているのである。

この理解のための枠組みの「再一枠づけ」(リフレーミング) は、詩編における多くの嘆きの祈りの視点と合致する。そうした詩編においては、引き起こされる危機は神が直接

¹² 野生の動物に与えられた自由と、そうした動物が人間の支配から独立していることについては、R. N. Whybray, "Wisdom, Suffering and the Freedom of God," in *In Search of True Wisdom: Essays in Old Testament Interpretation in Honour of Ronald E. Clements*, ed. E. Ball, JSOTSup 300 (Sheffield Academic Press, 1999), 231-45 (241-43) を見よ。しかし著者は、こうした事柄の内にヨブの苦しみに対する答えがあるとは考えていない。

手を下しているわけではないが、しかし苦しんでいる人は危機が起こったとき神に助けを求めることができる。ヨブの場合、彼はただ悔い改めるべきである(42:6)——罪深い人生を悔い改めるのではなく、むしろ神についての彼の誤った見解を悔い改めるべきである。それは、詩編における神に対する訴えの場合と同じように、信頼への裏切りとして見なされてはいない。その後、彼の神との交わりは回復されるだろう。その交わりの一部として、彼は三人の友人のために赦しを祈らなくてはならない(42:7-9)。その表面的な役割が、皮肉なことに逆転されているのである。ヨブは聖人であり、彼らは罪人である。神は、「わたしについてわたしの僕ヨブのように正しく語らなかった」(7節) ことについて三人の友人を非難する。ここで神が「ヨブのように」と言っているのは、ヨブが神の演説に対して応答した内容のことである [42:1-6]。それは短い応答であったが、しかし [神にとって] 十分なものであった。

すでに最初の神の演説の終わりの箇所である 40:4-5 において、ヨブは自分が神の挑戦に答えられなかったことを認識していた。彼は自分が持っている理解のための枠組みを「再一枠づけ」すること (リフレーミング) を受け入れ、自分の訴えを取り下げる心の備えができていた。第二の演説の終了時に、彼は自分が「耳で聞くことによって」、自分が神「についてこれまで聞いてきた」こと(42:5)を断念するための準備ができたと言明している。言い換えるならば、ヨブは、あらゆる人間の経験、特に彼自身の経験に合致しないような神の摂理についての伝統 [的理解]¹³ を修正しなければならなかったのである。彼の場合、そうした伝統 [的理解] は、神の顕現を通して示された新しい啓示によって乗り越えられた。彼の状況は変えられなかったが、今や彼の視点が変わった。彼が「塵と灰の上に」(42:6)悔い改めたとき、彼はまだ 2:8 に記されている灰の中に座り続けていた。「その灰は同じである、しかしそこに座っている人は変えられた人である。」¹⁴ 実際、42:10-17 に従えば、ヨブは前に進むことができた。詩編ではしばしば、何か新たなことをまだ経験してはいないけれども、しかし希望と共に前に進むということが歌われるが、まさにそのような前進である。ヨブは「逆境の時期」から「新たにされた順境の時期」(renewed orientation) へと進み始め、そして人生の季節の「巡り」あるいは「らせん」が、新たな展開を示し始めたのである。ヨブはついに祝福を見いだした。そしてとりわけ、彼は素晴らしい慰めを見いだした。すなわち「兄弟姉妹、かつての知人たちがこぞって彼のもとを訪れ、…いたわり慰め」(42:11)たのである。

私たち読み手は、「逆境」というヨブの悲惨な時期のことと、神の演説によってヨブの持っていた理解の枠組みが「再一枠づけ」されたこと (リフレーミング) といったヨブ記の内容のことでまだ頭がいっぱいである。[しかし実は、] コヘレトの言葉 9:11-12 で、こ

¹³ Matitiah Tsevat, "The Meaning of the Book of Job," *In The Meaning of the Book of Job and Other Biblical Studies* (Ktav, 1980), 1-37 (21-22) は、伝統について有益に解釈している。詩編 44:1 を参照。

¹⁴ Tsevat, "The Meaning of the Book of Job," 23.

うした理解の「再一枠づけ」に関してよく似た記述がある。この箇所は、私たちの人生に突然入り込んでくる否定的な事柄について言及し、またそのような変化を「好機」(チャンス)という観点から解釈している。そこにおける内容は著しくヨブ記のメッセージに似ている。すなわち「足の速い者が競争に、強い者が戦いに 必ずしも勝つとは言えない。知恵があるといってパンにありつくのでも 聡明だからといって富を得るのでも 知識があるからといって好意をもたれるのでもない。時と機会はだれにも臨むが 人間がその時を知らないだけだ。魚が運悪く網にかかったり 鳥が罠にかかったりするように 人間も突然不運に見舞われ、罠にかかる」のである。言い換えるならば、実存的危機は、常識的な予測など一向に顧みずにどんな時にも起こり得るし、突然降ってわいたようにやって来る。人生とはそのようなものになり得るのである。

私たちは、当然のこととして、新約聖書が以上に述べたようなことと何ほどか似たようなことを語っていないかと問うかもしれない。二つの箇所が思い浮かぶ。第一に、ヨハネによる福音書 3:8 においてイエスは、風が「思いのままに」吹くと語っている。もちろんテキストは決して私たちの現在抱えている問題を考慮してはいないが、しかしそれに対する示唆を与えてはくれる。例えば台風が私たち人間の生活の領域を脅かすような時には。第二に、より直接的に関連する箇所として、ルカによる福音書 13:1-5 が挙げられる。ここにおいてイエスは、ローマ総督が殺害したガリラヤ人たちについて、またシロアムの塔が倒れて死んだ 18 人の被害者について尋ねられている。イエスは、これらの人々が個人的に犯した悪が、神の摂理における悲劇の「原因」として理解されることはあり得ないという態度を取られた。イエスは、自分に質問をしてきた人々がある前提に立脚して話していることを感じ取っていた。すなわち、自分が生き続けているということは、神が自分を正しいとして受け入れて下さっているという前提である。しかし主イエスは彼らに次のように警告する。すなわち、神が人間の道徳的な行いに従ってこの世界を保持しておられるという考え方 (moral providence) の枠組みを脱却して物事を考えるようにと。そして同時に、不運な出来事に見えることに、神が微細に介入している (divine micromanaging) わけではないということを受け入れるようにと。それこそが時に、神が創られた世界の〔ありのままの〕姿であることがある。そしてヨブ記において見られたのはまさにそうしたことであった。こうした理解は原則として神の摂理を否定するものではないが、しかしすべての出来事に神が介入していると即座に理解することを拒否するものである。

私たちがこの講演で見てきた旧約聖書の御言葉は、私たちに何を語りかけているのだろうか? そのことはすべて、神がご自身の摂理の中で、人間の苦難にどのように関わっておられるのか、そしてそもそも本当に関わっているのかどうか、ということに関係している。このことについての答えは様々なものが考えられる。それぞれの答えは、ある文脈では正しく、しかし別の文脈では間違っている。ほとんどの嘆きの詩編は、危機から信仰者を救うために神が介入するまさにそのところで、神の摂理が明らかにされることを期待している。彼らは自分たちが経験する危機の内に神の関与を見出せないのである。これらの

詩編のいくつかにおいては確かに、苦難と神の道徳的摂理の間の強い結びつきが認識されている。神は、彼らの悪事のために信仰者を裁いていたが、しかし罪の告白の後には、再出発を与える寛容な神として描かれているのである。これらの詩編とは対照的に、ほかの詩編のいくつかにおいては、無実が主張されている。嘆きの詩編と呼ばれるものの内の三分の一は、そうした無実の訴えを行っている。それらの詩編は、神が約束された希望を実現して下さらなかったことに関心を寄せている。理由としては、「順境の時期」において見出されるはずの神の力を信じ続けることと、〔実際には〕神がご自分の力を維持することに失敗している〔ように見える〕こととの間の食い違い〔を詩人が感じているためか、〕あるいは、「逆境の時期」においては神が詩人の祈りに答えて苦しみを去らせてくださるはずなのに、そうならなかったという神の「失敗」〔に詩人が直面しているかのどちらかが考えられる。〕苦難とは複雑な現象である。概して、苦しんでいる人は明らかに、どういった種類の苦難が今現在与えられているのか、そして〔そうした状況の中で〕自分のものとして用いるべき詩編がどのタイプの詩編なのかを認識するようにと招かれている。

私たちがこのシンポジウムで学んだ聖書の御言葉はまた、苦難を克服する方法をも提供している。私たちはすでに、罪の結果としてやってくる苦難の場合に関して、そのことに言及した。すなわち、神は〔私たちが罪を犯して苦しんでも、〕もう一度チャンスをご下さる。そして哀歌という書物は、希望を与えることができるそうした救済の可能性について深く把握している。哀歌はまた、ふさわしいときに嘆き、そのような仕方で苦しみに向き合うことの必要性をも強調する。嘆願の詩編においては、怒ることにおいて感情的な解放が認識されており、また祈る時にさえそれが抗議の形をとり、更には、自分たちの代わりに神が働いてくださるようにと神に圧力をかけることさえしている。詩編 73 編は、道徳的摂理が神自身のタイミングに基づくこと、また神がいずれは最終的にそれを具体的な行動によって示すことを受け入れている。この詩編の詩人がそうした答えに達するための実践的な方法は、信仰共同体における礼拝に実際に参加することである。コヘレトの言葉もこれと同じ神学的な答えに達している。もちろん、コヘレトの場合は苦しみと実践的に取り組む手段として、自分を大切にすること、実り豊かな時間を過ごすこと、そしてほかの人からの助けを得ること、といったことが挙げられている。ヨブ記は無実の人の苦難の問題を探究している。この書物は、ほかの信仰者の苦難の性質を誤って判断することに対して警告を与えている。一方でこの書は、ヨブが人生最悪の時にまさにそうしたように、信仰を持ち続けることの素晴らしさについて語る。他方でこの書は、神の世界が苦難を引き起こす危険な機会に満ちていることを知っている。この書は以上のようなスタンスを取りつつ、神は苦しみの原因としては関与していないと理解することにおいて殆どの嘆きの詩編と軌を一にし、しかし同時に信仰者の立場に固く立って、信仰者が窮地に陥った時の救済の恵みを提供しているのである。